

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）
分担研究報告書

周産期における遺伝性血栓症の診断と治療に関する研究

研究分担者

金子 政時 宮崎大学医学部 生殖発達医学講座産婦人科分野 准教授

研究要旨

小児新生児期における遺伝性血栓症の新生児を発症前に抽出することは、新生児予後の改善に繋がる。そこで、母体の血栓性疾患の既往というリスク因子からそのような児のスクリーニングが可能かを明らかにすることを目的とした。宮崎大学で取扱った妊婦の中から血栓性素因のある 2 名の妊婦(脳梗塞既往のある妊婦と血小板増多症合併妊婦)を抽出し、妊娠・分娩経過と新生児経過をフォローした。両児は血栓疾患の発症を認めなかった。大規模なコホート調査の必要性があるものと考えられた。

A. 研究目的

小児新生児期における遺伝性血栓症の新生児を発症前に抽出することは、新生児予後の改善に繋がる。そこで、母体の血栓性疾患の既往というリスク因子からそのような児のスクリーニングが可能かを明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

平成 25 年に宮崎大学で管理した重症妊娠高血圧症候群、子宮内胎児発育遅延児の母体、先天性アンチトロンピン 低下症、深部静脈血栓症および脳梗塞の既往のある血栓性疾患の素因のあるハイリスク妊婦から出産した児の出生時の所見収集と血栓性疾患の発症に関して経過を追跡した。

(倫理面への配慮)

本研究は、後方視的研究であり、医学的な見地から測定の意味を考え、必要性がある場合は妊婦への説明後に採血した。結果の公表については、匿名とし、本人同定ができないように配慮することで、妊婦の同意を得た。

C. 研究結果

同期間に、278 例の妊婦を当大学で管理した。その内、本研究の対象となる妊婦は、

脳梗塞の既往を持つ妊婦と血小板増多症合併妊婦の 2 名であった。

脳梗塞の既往のある妊婦の詳細;38 歳時に脳梗塞を発症し、左上下肢筋力低下を認める。バイアスピリン内服下で妊娠が判明した。妊娠判明後にヘパリンへ変更した。抗リン脂質抗体陰性。妊娠中、凝固線溶系に大きな異常なく経過した。妊娠 35 週 3 日に前期破水を認め、オキシトシンにて誘導後に 2564g の女児を経膣分娩した。

血小板増多症(本態性血小板症疑い)合併妊娠の詳細;小学 3 年生時に本症を発症した。前回妊娠は 18 歳時に帝王切開を受けている。今回、自然妊娠成立後に当科紹介となる。妊娠初期の血小板数は $132.8 \times 10^4 / \mu\text{L}$ であった。バイアスピリン 100mg/day 内服開始した。妊娠中に APTT は正常、PT 延長を認めた。妊娠 36 週 2 日に陣痛発来したために帝王切開を施行した。

これらの妊婦の児の予後を厳重にフォローした結果、頭蓋内出血等のエピソードはみられなかった。

D. 考察

我々の施設で管理した 278 名中 2 名の妊婦(0.7%)が、遺伝性血栓症の新生児を出産するハイリスクとして抽出された。この頻度

は、前年度の調査と一致していた。

遺伝性血栓症を新生児期に効果的に診断し、治療を効果的に行うために、血栓性素因をもつ母体の効率的なスクリーニング法を確立することは臨床上有意義である。本年度は、プロテイン S 抗原、プロテイン S 活性、プロテイン C 抗原、プロテイン C 活性値を妊娠中に測定していないので、それらの変動をみることはできていない。

母体血栓性疾患の病院は多岐にわたり、その中から遺伝性血栓症との関係を導くためには、大規模なコホート調査が必要であると考えられる。

E. 結論

妊娠直前に脳梗塞を発症した妊婦および血小板増多症の妊婦においては、妊娠中に凝固線溶系に大きな異常を認めず、それらの児の経過にも特に異常を認めなかった。

F. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表
なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし